

# 記憶のカタチ「探しています 広告マッチの箱」 ありよしきなこ



防災マニアが高じて、北海道道東網走郡の少し内陸にある小さな町に、土地を求め小屋を建て、家庭菜園をはじめて三年目の夏です。日常がデングリ返っても平静でいられる備えを求める姿勢が、趣味と化している思考や行動様式、これを防災マニアと称しております。都内の住まいから千キロ近く離れたあいだを行き来する、マニアのやることは何かと極端なものです。じゃがいも、トマト、赤ピーツ、とうきび、かぼちゃ、枝豆など、まいた種置き去りにしてきた苗たちの、収穫の頃となり、八月後半より畑作業に追われています。肥料や農薬をやらない、いわゆる自然農法です。

前回植え付けに来たのは六月。ひと月以上経ち雑草に埋もれてしまった畑を見渡し、何をどこに植えたのだったかな、しゃがんで雑草を抜くことから始める。草むらに何やら球体？ なんだいこれは、どこからか飛んできた？ 子供の遊びのボールが飛んで転がってきたか、いや、黒っぽい表面だけど緑のようにも見えるこの片手に余るボール、あれえ？ 指先でつついてみる、いったんそっぽをむく、一息入れて、草むらをかき分け、丸みをさすってみて、正体は揺るぎないものとなる。これスイカだわ、表皮がしま模様ではない種の見玉スイカ、できたらいいなと冗談半分で植えたんだった、えええ？ できてしまったわけ？ この夏、北海道は異例の暑さなのでした。

ボール遊びするお子様など、近くにいる様子はない、そっちもこつ

ちも一人暮らしの高齢者。町の人口はこの二、三年で急激に減った。急に減るなんてね、あんなこんなケミカルで免疫を落とすからだと言いたいんですけどねええ。こんなことで自治体を持つのだろうか、北海道の情報誌に掲載されることも減ってきている感じがする。

地域おこし協力隊という国の制度がある。地域の自治体と二年くらいの契約でお手当をもらって、地域の活性化を担う、住民票もそこに移すのよ。この制度を利用して来た立場と現地とのトラブルがネットを賑わして久しい。とある一家の、一部住民との軋轢と、もうやっていけないとそこを去る——一連の流れをネット動画サイトで視聴した。そのサイトは視聴者がコメントを書き込めるようになっていて、実に膨大な数のご意見の羅列に目を通す。去っていくあなたは悪く無いの大合唱だ。田舎あるある、うちもそうだ、と過疎地域暮らしの人や移住体験者のコメントも多い。そうねでもねえ、どっちもどっちとまでは言わないけど、どちらかだけが悪いなんて、そうあるものでも無い。確かに耐え難い扱いを受けている、しかしですね、理想を求め、完璧な理想を求めて来るよそのの硬直した感じも伝わってくる動画でした。

自治体の多くは、地域の雑用に手を貸してくれる人員を求めているのではないかなあ、張り切って新しいことを提案して動いてもらおうとつまづくのよね、そこに暮らす住民にしてみれば、これまで通りになりたいのですよ、この辺りみてもそうですわ、まったくとした平和、庭で取れた野菜を手に、いるかい？と声をかけ、時々はパークゴルフ（北海道発祥のゆるやかな球技）、草むしりなど自治会の奉仕活動、

テレビが教理、あっちむけほい。

「この町は、何をやっても中途半端」、人生の四分の一近くをこの地で過ごし、もうすぐ傘寿を迎えるご近所さんが言う。中途半端とは自治体の計画性の甘さを指している。町の駅前が観光客で賑わったのは半世紀も前のこと、空港でレンタカーを借りてこの町は素通りされる、交通の要所として栄えた大通りはシャッターがまばらに並ぶ。衰退が他より際立つほどでは無いけど、覇気が無い、年金があるうちは表立って発言するなんてことありえない。無い無い無いで、若い世代は空回りの気持ちで職を求めて去っていく。こうして活気を少うしずつ消していく。だけど暮らしは続く、おやきの店で日がおしゃべりしたいじっちゃんばっちゃんを見て、とっくり考えてみる。

町中にこれといった売りが無い。何か話題となるようなものも無い。だったら意識的に作っていくしかない。名物なりイベントなり、自治体主導ではなく、住んでいる人々の底から上がってくる感情が何かのカタチになるとき、地域発行のフリーペーパーなどのローカルメディアに話題を提供できるほどの動きになる可能性だって、なくは無い、かも。より多くの町の人が興味を持てるもの、何だろう、そうねえ、過ぎた日々、町という空間における思い出。後ろ向きだけど、前向きな、そう、アウフヘーベンな展開、どうでしょう。

昨年、同じ道東エリアの知床斜里町のイベントで、広告マッチ箱を使ったものが好評であった。これ、やってみたい、店の広告マッチ箱は記憶のカタチだね、宣伝用のマッチ、少し昔はたくさんのお店にあり

ましたよね。町の賑わっていた通りを中心に紙の地図の上に、配置してみたら楽しいなあ。もうとうの昔になくなってしまった、まだあるけどシャッターで閉ざされている、店舗がある、あったところに、その店の広告マッチ箱を配置する。今どき、マッチは忘れられた地味なもので、マッチ自体に興味は持てなくとも、それが町の地図となることで多少なりとも関心を寄せるのでは無いでしょうか？ 道東のそれぞれの町ごとの地図に記憶が重なっていく、そんな展示会、できなかな。町の記憶を照らすともしびになるといいなあ。

日用の出番がなくなり、マッチ箱は散逸するばかりですけど、思い出をかき集めることを始めてみました。「探しています、広告マッチの箱」と題したチラシを作って配ってみました。

「仏壇の奥にあったわ」、「じいさんがむかし集めてたっけか」、「ボク集めてます」と箱いっぱいを見せてくれるお方、なんだかんだと寄せられる。マッチ箱が配置される空間に住まう人々との出会いともなっていく。

網走、北見から釧路、根室にかけて広がっている北海道道東エリアの広告マッチ箱、お心当たりの方がいらしたら、どうぞご一報のほどお願い申し上げます。

以下、チラシの文言を拾います。

「なつかしい！」ちいさなマッチ箱をのぞきこむ町の人びと。斜里町で催された葦の芸術原野祭(二〇二二)に広告マッチが展示されま

した。斜里の町の地図の上にマッチ箱が置かれた様子に、思い出がよみがえったのです。

マッチ箱を集めて楽しんでいた時代がありました。道東の町にもたくさんの方の広告マッチがありました。街の人々の記憶を照らすことができる広告マッチ。どこかで眠っているかもしれない、忘れられたマッチの箱、展示用にお貸し下さい。

